

『悠遊』に寄せた6編

吉田 真人

2020年の第27号から連続で6編を掲載した。

『Fine City 案内』

シンガポール案内で、Fineは“きれいな”と“罰金”の2義語である。訪問の機会があれば、ほぼ街の中央にある「日本人墓地」を是非訪れて欲しい。そこには無数・無名の小さな墓石があり、若くして異国の地で命を終えたからゆきさん達が眠っている。合掌。

『失われた時を求めて』岩波新書版 吉川一義訳 全14巻

ベル・エポック時代の上流階級が集うサロンの様子や恋愛模様が延々と書かれている。「mère」を「母」と「maman」を「お母さん」と訳している。しかし各々を「母上」と「母」とした方が、「お母さん」という子供っぽい響きがなくなるのではないか。

『地球温暖化クイズ』

英国の国際環境経済研究所によるクイズ12問を紹介。折から英国のグラスゴーでCOP26が開催されていた。運悪く（よくあることなのか）微風や無風の日が続き風力発電がダウン、電力不足となり、急遽閉鎖中の石炭火力を稼働させて凌いだ。

『オペラ座の怪人』

ロンドンとニューヨークで計10回程観劇した。大半が出張中の日程の合間である。今であればコンプライアンス上問題になるかも知れないが、時効として許して貰おう。日本では劇団四季が公演をしているが、学芸会のように見に行く気にならない。

『Independent—英国の語学学校』

40数年前の駐在勤務の始まりに、英国の田舎都市（といっても州都）の語学学校に行った。最初の授業で30代の女性教師が、カセットテープでビートルズの曲を流した（She's leaving home）。英国で非常に重要なIndependentという価値観を表わしたもので、是非この概念を記憶して欲しい、と力説。

『出自は百姓』

江戸期の先祖も、当時としては長生きであったようだ。

故郷の街は織物業の衰退と共に、人口も12万人から（近隣を合併したにも拘わらず）9万台人と見る影もなくなってしまった。

（2025年12月11日）